

Ⅲ 世帯員の健康状況

1 自覚症状の状況

病気やけが等で自覚症状のある者〔有訴者〕は人口千人当たり 255.7（この割合を「有訴者率」という。）となっている。

有訴者率（人口千対）を性別にみると、男 233.2、女 276.7 で女が高くなっている。

年齢階級別にみると、「9 歳以下」の 94.3 が最も低く、年齢階級が高くなるにしたがって上昇し、「80 歳以上」では 465.5 となっている。（表 12）

症状別にみると、男女とも「腰痛」での有訴者率が最も高く、次いで男では「頻尿（尿の出る回数が多い）」、「肩こり」、女では「肩こり」、「手足の関節が痛む」となっている（図 17）。

表 12 性・年齢階級別にみた有訴者率（人口千対）

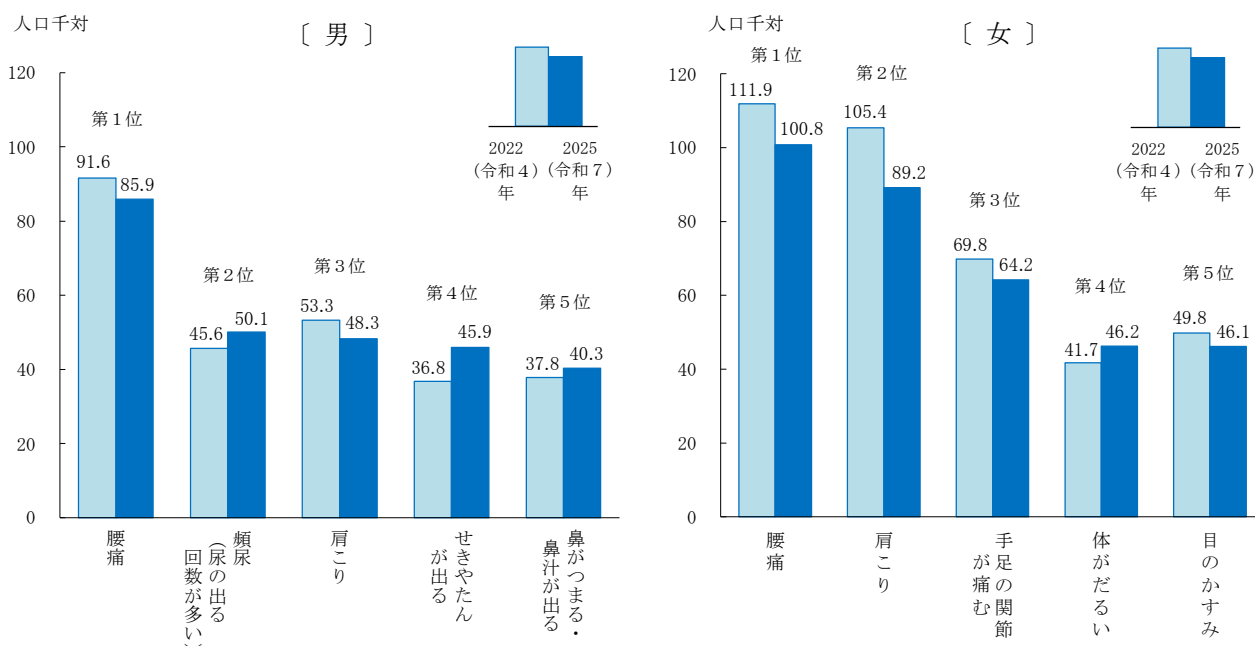
（単位：人口千対）

年齢階級	2025（令和 7）年			2022（令和 4）年		
	総数	男	女	総数	男	女
総 数	255.7	233.2	276.7	276.5	246.7	304.2
9歳以下	94.3	99.0	89.5	123.3	132.9	113.1
10～19歳	109.9	107.4	112.6	119.7	112.1	127.6
20～29	130.6	112.3	148.8	153.7	121.3	186.1
30～39	181.9	158.0	206.2	199.7	168.9	230.4
40～49	198.5	180.2	216.9	223.6	189.3	257.3
50～59	240.4	213.7	265.9	268.8	225.4	309.6
60～69	291.4	271.4	310.0	321.4	299.5	341.9
70～79	382.0	365.0	397.1	408.4	389.0	425.5
80歳以上	465.5	458.0	470.7	492.7	485.3	497.6
（再掲）						
65歳以上	392.6	374.8	407.3	418.2	397.6	435.2
75歳以上	443.0	428.9	453.8	474.6	462.4	483.7

注：1）有訴者には入院者は含まないが、有訴者率を算出するための分母となる世帯人員には入院者を含む。

2）「総数」には、年齢不詳を含む。

図 17 性別にみた有訴者率の上位 5 症状（複数回答）



注：有訴者には入院者は含まないが、有訴者率を算出するための分母となる世帯人員には入院者を含む。

2 通院の状況

傷病で通院している者〔通院者〕は人口千人当たり 409.2（この割合を「通院者率」という。）となっている。

通院者率（人口千対）を性別にみると、男 398.1、女 419.7 で女が高くなっている。

年齢階級別にみると、「9 歳以下」の 102.1 が最も低く、年齢階級が高くなるにしたがって上昇し、「80 歳以上」で 705.8 となっている。（表 13）

傷病別にみると、男女とも「高血圧症」での通院者率が最も高く、次いで男では「糖尿病」、「脂質異常症（高コレステロール血症等）」、女では「脂質異常症（高コレステロール血症等）」、「眼の病気」となっている（図 18）。

表 13 性・年齢階級別にみた通院者率（人口千対）

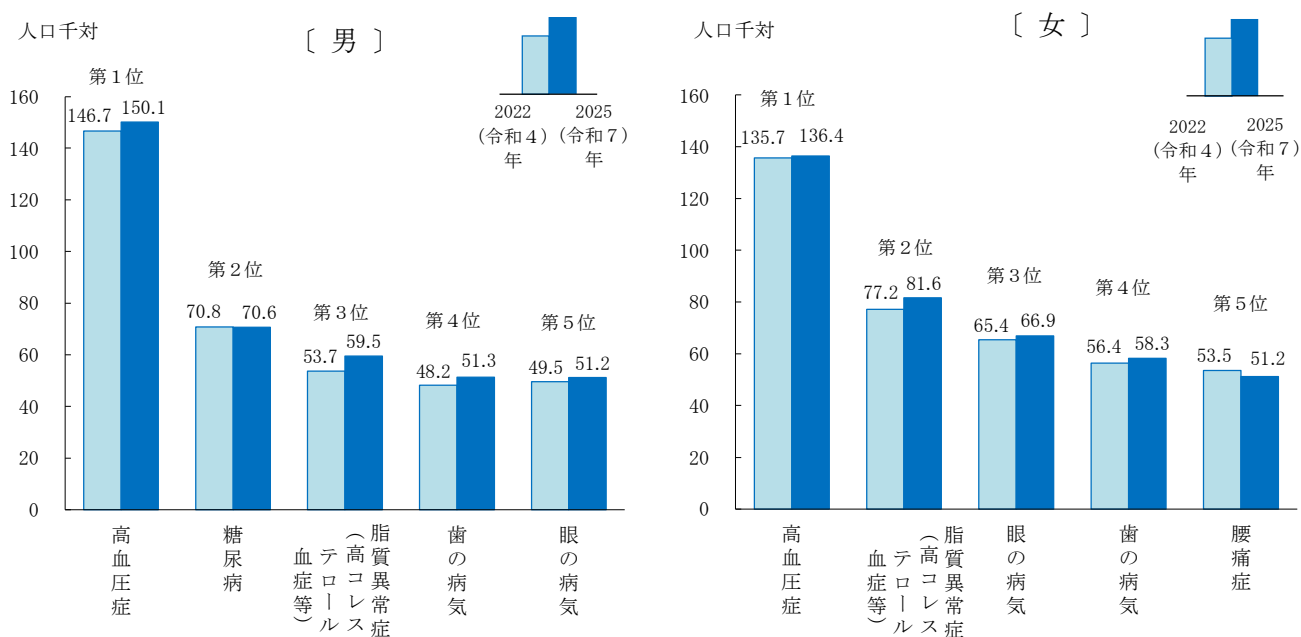
（単位：人口千対）

年齢階級	2025（令和 7）年			2022（令和 4）年		
	総数	男	女	総数	男	女
総 数	409.2	398.1	419.7	417.3	401.9	431.6
9歳以下	102.1	109.4	94.4	131.3	144.4	117.6
10～19歳	124.8	128.8	120.7	138.0	141.3	134.7
20～29	142.0	122.7	161.3	153.5	128.3	178.6
30～39	204.9	188.7	221.4	211.3	187.4	235.1
40～49	272.7	264.8	280.7	280.2	265.1	295.0
50～59	401.2	400.0	402.5	418.8	408.5	428.5
60～69	568.8	578.9	559.3	589.8	596.8	583.1
70～79	690.5	698.4	683.4	708.1	710.4	706.1
80歳以上 （再掲）	705.8	709.3	703.4	727.6	740.0	719.2
65歳以上	678.6	685.1	673.2	696.4	700.8	692.7
75歳以上	707.6	713.3	703.3	729.2	739.2	721.9

注：1）通院者には入院者は含まないが、通院者率を算出するための分母となる世帯人員には入院者を含む。

2）「総数」には、年齢不詳を含む。

図 18 性別にみた通院者率の上位 5 傷病（複数回答）

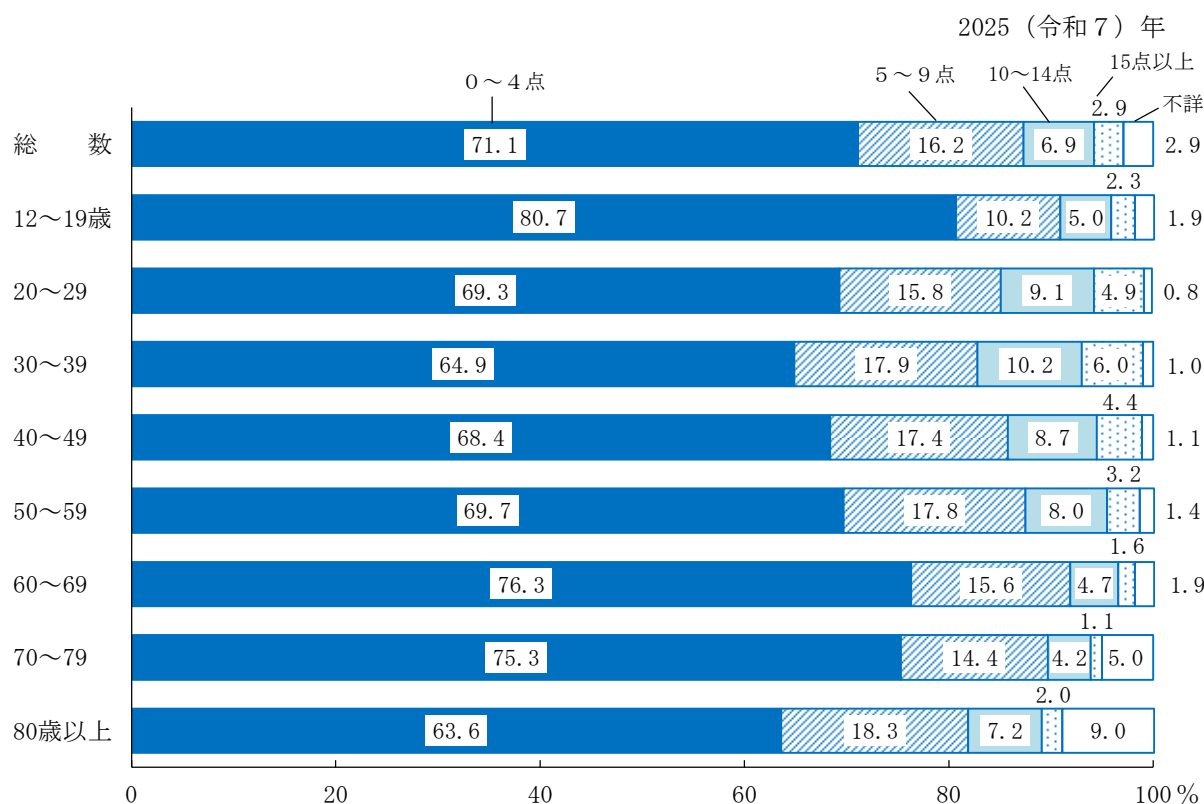


注：通院者には入院者は含まないが、通院者率を算出するための分母となる世帯人員には入院者を含む。

3 こころの状態

過去1か月間のこころの状態を点数階級別にみると、「0～4点」が71.1%と最も多く、また、すべての年齢階級で「0～4点」が最も多くなっている（図19）。

図19 年齢階級別にみたこころの状態（点数階級）の構成割合

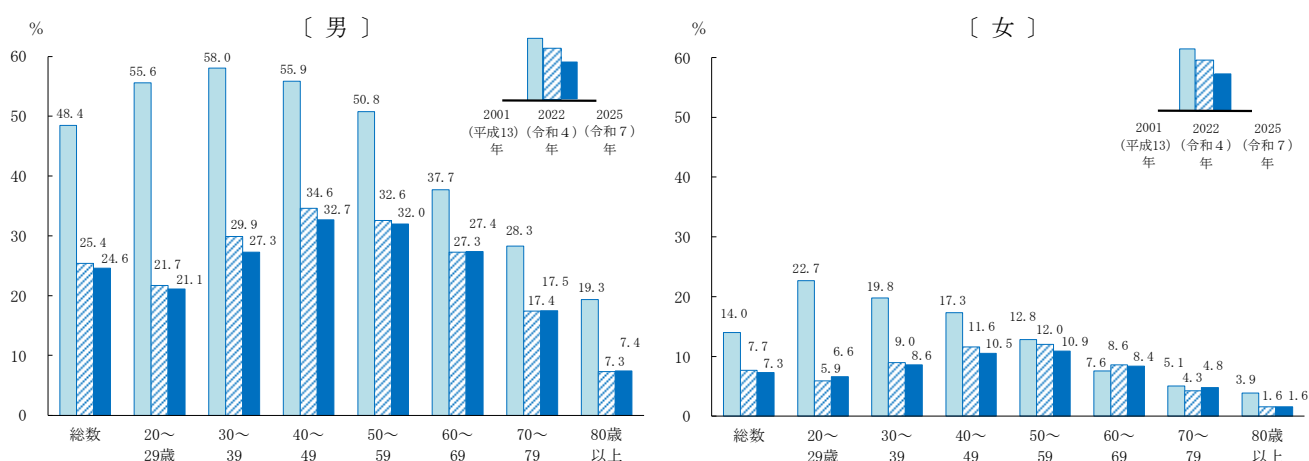


注： 1）12歳以上の者（入院者は含まない。）について集計した。
 2）こころの状態の点数とは、過去1か月間のこころの状態について、6つの質問の回答を5段階（0～4点）で点数化して合計したものである。
 「こころの状態」については、用語の説明を参照。

4 喫煙の状況

喫煙の状況を性・年齢階級別に2001（平成13）年と比較すると、「喫煙している者」はほとんどの年齢階級で低下しており、男女とも「20～29歳」が最も低下している（図20）。

図20 性・年齢階級別にみた喫煙している者の年次比較



注： 1）20歳以上の者（入院者は含まない。）について集計した。
 2）「喫煙している者」とは、「毎日吸っている」又は「時々吸う日がある」と回答した者の合計である。

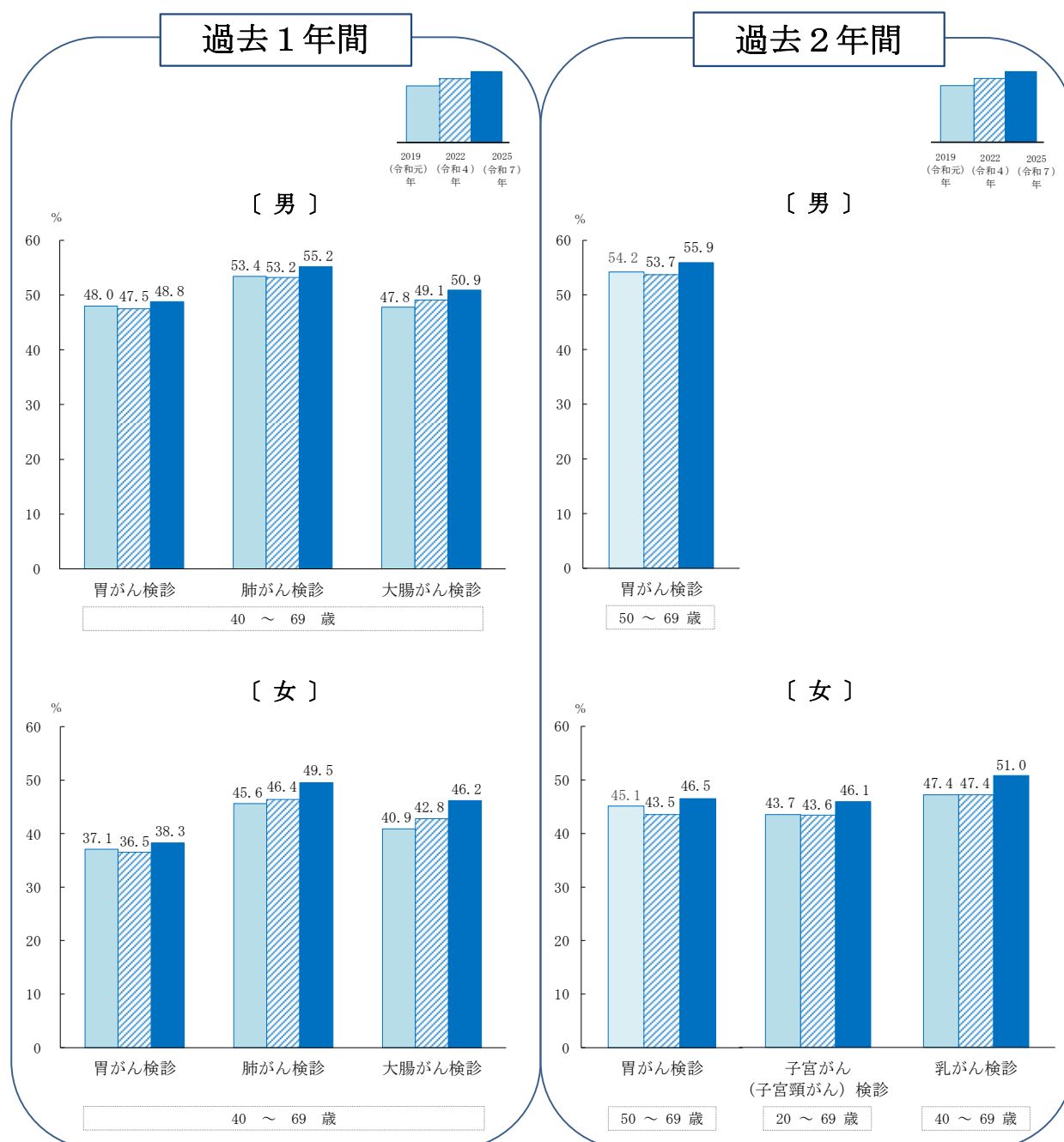
5 がん検診の受診状況

過去1年間に「胃がん」「肺がん」「大腸がん」の各がん検診を受診した者の割合を性別にみると、男女とも「肺がん検診」が最も高く、男で55.2%、女で49.5%となっている。

過去2年間では「胃がん検診」を受診した割合は男が55.9%、女が46.5%となっており、「子宮がん（子宮頸がん）検診」は46.1%、「乳がん検診」は51.0%となっている。

また、いずれのがん検診においても、受診した者の割合は上昇傾向となっている。（図21）

図21 性別にみたがん検診を受診した者の割合



- 注：1) 入院者は含まない。
 2) がん検診の受診率については、「がん対策推進基本計画」（平成24年6月8日閣議決定）に基づき、算定年齢対象を40歳から69歳（子宮がん（子宮頸がん）検診は20歳から69歳）とした。
 3) 胃がん検診の受診率については、「がん予防重点健康教育及びがん検診実施のための指針」（平成20年3月31日厚生労働省健康局長通知別添）の一部改正に基づき、過去2年間の受診率についても算定し、過去2年間の受診率の算定対象年齢は50歳から69歳とした。
 4) 子宮がん（子宮頸がん）検診の受診率については、「がん予防重点健康教育及びがん検診実施のための指針」（平成20年3月31日厚生労働省健康局長通知別添）の一部改正に基づき、2025（令和7）年調査の受診率にはHPV検査の受診を含む。